



矢島 渚男 選

杖代の腕組み歩く梅雨晴間

【評】高齢化で最近よく見られ、私もやります。安全でしかも夫婦円満。上皇御夫妻のよき影響でしょうか。風鈴や忘れたふりの思ひ遣り

宮崎市 野中 一則

【評】風情ある風鈴の音が、強風だと眠れない。相手のことを思い遣って、出し忘れたふりをしている。秘かにも生きる賢さ蟻地獄

石岡市 進藤 寿朗

【評】小学校の自由研究で観察したことがあってこの虫の賢さは少し知っている。蟻を待つ根気よさ。砂をはね上げる技術。それがかかったときの奮闘ぶり。けれど人間の賢さとは異質。言葉による伝達と遺伝的集積。そんなことを今は考える。をちこちに今も戦死者糸蜻蛉

池田市 後藤 和豊

夏至の日や何するでなくしたでなく

岡崎市 加藤 幸男

牛の尾が背ナの蠅打つ牛舎かな

館林市 篠塚 勝晴

くつきりと伊勢水道へ青葉潮

浜松市 宮田 久常

暑気払ひ時代遅れを競ひけり

栃木県 あらあひとし

ファン付のベストを羽織る酷暑かな

国分寺市 加藤 武夫

桑の実に探鳥会の脚休め

羽生市 岡村 実

高野ムツ才 選

夜の秋うしろに誰か来てをりぬ

【評】酷暑が続いたのち、どこか秋の気配を感じる夜が「夜の秋」。座っているとき、ふと後ろに人がいるような気がした。風鈴の音などに誘われて、亡き親しい人が訪れたのかも知れない。微妙繊細な把握。

山祇のぬまに脱ぐや蛇の衣

尾鷲市 中村 東太

【評】まるで天から降ってきた水浴びを始めた天女のような蛇。魅惑的な神話的世界の始まり。尺蠖のあくびのごとく立ちあがる

高崎市 長友 聖次

【評】尺取虫が前足を高く上げた姿と昼寝を終えた少年が両手をあけてあくびした姿が重なって見えてくる。これも比喩の力。肌脱ぎて網を繕う太き指

丸亀市 服部 芳郎

新宿の煮崩るるごと大西日

北本市 萩原 行博

夕焼の先の先にはウクライナ

さいたま市 関根 博

夕立あとみななきれない眼をしてる

東京都 山田真理子

蛍袋月光入れば羽化はじむ

川崎市 沼田 広美

万緑の雨に鎮もる無言館

調布市 野口 澄栄

河鹿笛静に溶け込む夕日かな

川越市 大野宥之介

正木ゆう子 選

用もなく新宿東口の夏至

【評】用もなく新宿に来た孤独感と、夏至の取合せだが、強く印象に残るのはむしろ夏至の不思議な空気感の方だ。すべての言葉が混じり合い、混沌とした都会の夏至が描かれた。虹即是色即是空空に虹

松江市 三方 元

【評】般若心経の一節「空即是色」の「空」を「虹」に置き換えて面白い。クウとコウの音が似ているので読み易く、下五だけ訓読なのも自然。アキレス腱のばす窓辺を虹うすれ

座間市 剣橋 こじ

【評】虹を見ようと窓辺により、突っ立って見るのも手持ち無沙汰、というので、アキレス腱伸ばし。いかにもやりそうな、窓辺の動作である。鳩すわり込む噴水の散るあたり

三原市 天崎 千寿

端棒はわが女孫なり大神輿

西尾市 椎名 貴寿

虫の秋地球程好く傾きぬ

野田市 鈴木 武

撫む指にカナヘビ両手かけて夏

松山市 稲葉 豊美

屋敷寝いつも少し慌てをり

葛城市 二上 三六

蛇母本当に美味しそうな色

山口県 佐々岡美保子

どちらかと言えは夜が好き水中花

名古屋市 渡辺 淳子

小澤 實 選

どんぶりに買ったばかりの金魚かな

【評】買ってきたばかりの金魚ではあるが、まだ水槽の準備がない。とありあえず、どんぶりに水を張って入れてみた。どんぶりの内側の白に映えて金魚が、鮮やかに見えている。踊の輪遠く見てある転校生

吹田市 前田 尚夫

【評】この町に来たばかりの転校生が、盆踊りの輪に入らず、遠くから見ているのに気づいた。声をかけるべきかちよつとどきどきするのだ。腰にタオル巻いただけなりビール干す

青梅市 増田 正

【評】風呂上がりのビールを楽しむ。体をバスタオルで拭いて、そのタオルで腰を覆っただけ。誰にも見せられないが、至福の時間。南嶺の高坪に盛る青林檎

名古屋市 可知 豊親

父の日に葉書百枚娘より

千葉市 小林 昭

ベンチャーズ聴いてウキウキ喜寿の夏

長野県 村田 実

翅残し虫を完食したる蜘蛛

横濱市 我妻 幸男

五階まで守宮のたづね来し日あり

上尾市 山田 正雄

女郎蜘蛛男根犯る村やしう

下妻市 神郡 貢

経を読む僧の頭に蠅とまる

相模原市 はやし 央

俳句あれこれ 成田一子(俳人)

ハンカチ洗いつつ

「今日のこの今日のハンカチ洗いつつ 今井千鶴子」
旅先でハンカチを洗うのが好きだ。ホテルの洗面台、ボディソープをたらして、アライクマみたいにコンショコンショッと洗う。出張先なら仕事の反省、観光なら明日はどこを廻ろうかなどとぼんやり考えながら「ハンカチ」が夏の季語と知ったのは俳句を始めてからだが、歳時記に「洗濯」というところとエモーションナルな季語を見つけた時は嬉しかった。現代ならば洗濯機を回して乾燥まで一気に、という具合なのだが、季語における洗濯はやっぱり手洗いがいい。夜風の吹き抜けるベランダで、星空を見上げながらこまごましたものを干す。シャワーや入浴など、眠る前に水と触れ合う行為は安眠をもたらすように思う。夜の小さな洗濯の、つかの間の水との戯れも、心にささやかな安らぎを与える。八夜濯のしぼりし水の美しく 中村汀女



題字デザイン・イラスト 福田美蘭